

兵庫県環境審議会総合部会第2回環境基本計画検討小委員会 会議録

開会の日時 令和5年12月27日  
午前10時00分開会  
午前12時00分閉会

場 所 兵庫県民会館 10階 福の間

議 題 第5次兵庫県環境基本計画改定の基本的事項  
次期計画骨格について

出席者 会長 中瀬 勲 副会長 新澤 秀則 委員 川井 浩史  
委員 近藤 明 委員 泥 俊和 委員 中野 加都子  
委員 中野 朋子 委員 狭間 恵美子 委員 増原 直樹  
委員 向山 遥温

欠席者 委員 政井 小夜子 委員 三橋 弘宗 委員 横山 真弓

説明のために出席した者の職氏名

環境部長	菅 範昭	環境部次長	福山 雅章
環境部次長	上西 琴子	総務課長	谷口 明
環境政策課長	東尾 憲秀	温暖化対策官	濱田 美香
自然鳥獣共生課長	森田 直子	鳥獣対策官	河田 忠紀
水大気課長	山本 竜一	豊かな海再生推進官	望月 松寿
環境影響評価官	吉村 陽	環境整備課長	高原 伸兒

会議の概要

開会（午前10時00分）

○ 議事に先立ち、菅環境部長から挨拶がなされた。

1 議事

第5次兵庫県環境基本計画改定の基本的事項 次期計画骨格について

資料1 第6次環境基本計画（仮称）骨格 について、事務局から説明した。

以下、委員からの質疑があった。

（中野加都子委員）

共創力について、41枚目のスライドを見ると若い人ばかりが対象になっている。若い世代がこれまで環境に対してあまり関心がなかったため、若い人をどう巻き込んでいくかが中心ということはわかるが、高齢者をどう助けるかという視点が欠けている。例えば、Loopのリユース瓶に関して、瓶を返す際、QRコードを読み取った後、機械からバーコードを打

ち出し、デポジット分を返してもらわなければならないが、どうしてよいのかわからない高齢者が多いと思う。また、ごみ屋敷の原因は、肉体的に出せないことやだらしなことだけではなく、分け方がわからないからどんどん溜まっていくということがある。分け方を市や県に問い合わせると、「ホームページを見てください」といわれる。だが、ホームページの見方がわからない、そもそもパソコンやスマホを持っていない高齢者がいるため、結局分け方が分からず溜まっていくという悪循環になっているということも多い。そのため、今までのような若い人をどう巻き込むかというだけでなく、先ほどの説明の中にもデジタル技術の世代間の格差ということがあったが、例えば、スライドの43枚目に共創力について、「自然科学、社会科学、人文科学の広い視野からあらゆる英知を集めて、俯瞰的に考え解決策（ソリューション）を提示する」という説明があるが、もっとはっきりと「年齢や媒体を超えて様々な方法で助け合う」と言った方がわかるのではないか。はっきり言わなければ、若い人もどう助けてよいかかわからないし、高齢者もどう助けを求めてよいかかわからないということになる。地球規模の環境問題の生物多様性と資源循環というトレードオフもあるが、若い人が何でもデジタルでやってしまうことと、高齢者がどう助けを求めてよいかかわからないこと、それも一種のトレードオフだと思う。それをどうバランスするのかということ共創力の中身にしていき、共創力の意味することがきちんと県民に理解でき、どう自治体の行動や施策に反映されていくのかということをはっきりしていかなければ、今までのやり方が続いてしまう。そのため、具体的に取り組んでいる市の取組や例を紹介するなど、世代間のトレードオフを解消する方法として共創力があるということをもっとはっきりと示していただきたい。

（中瀬会長）

基本的に共創力はビジョンで使っている言葉なのか。環境部が初めて使っているのか。

（東尾環境政策課長）

共創力については、今回初めて使用している。

（中瀬会長）

初めて使用しているのであれば、52ページに共創力に関する記載が2コマしかなく、少なすぎると思う。共創力という言葉は、良い言葉であるのにボリュームが少ない。行政が、赤子のように市民を扱い、一番上の段階では市民から行政がきちんと応援してもらい、イコールパートナーでやるという参画の段階というものがある。今はまだ、行政が主導してやるという雰囲気だが、イコールパートナーになってきても市民やNPOの方々がしっかりとやってくれるという世界をどう目指すのかが共創力だと思うため、今の中野委員のお話も含めて、ぜひ検討していただきたいと思う。

（向山委員）

共創力について、3点お話ししたいことがある。

まず1つ目は、41ページのライフステージに応じ、体験を重視した環境学習・教育の推進の小学生向けの環境体験教育という点で、単発的な環境体験教育で終わらせてしまうのではなく、1年2年3年といった持続性のある環境体験教育をぜひ実施していただきたい。実際の例を挙げると、福井県鯖江市の小学校に4年生まで通っていたが、そこでされていた事例として鮭の放流事業がある。いくらが3粒入っているペットボトルを子供たちが一

人一人持ち、鮭を育てる。それを川に放流するとまた戻ってくるため、小学校6年生ぐらいで、鮭が帰ってきましたよという報告が来る。そうすると、あれは自分が育てた鮭かもしれないという環境意識を育むことができ、単発的なものよりも持続性があり、非常に良い。

また、市役所にグリーンカーテンをしに行く活動を小学校2年生のときに実施した。市役所が通学路にあり、自分たちが植えたグリーンカーテンがどんどん成長していく様子が見えるため、非常に良かった。

さらに、コンポストの配布を小学校にしてみる。実際に自分たちが出した生ごみなどがコンポストを通じ、野菜に変わっていく資源循環がわかる。そういった単発的ではなく持続性のある環境体験教育をぜひ、小学生にしていきたい。

2点目は、42ページの脱炭素社会推進に関する包括連携協定の取組で、共創力に関してもいえることではあるが、ひとつお願いしたいことがある。僕自身、後援会活動の立場から同世代に伝えることに非常に手応えを感じている。実際に、環境問題の発表会の感想を持ってきたが、この感想の中には、「未成年の方が講演を開いていることにとっても尊敬します。私も動きたいことがあるが、なかなかどうしたらいいのかわからなかったが、講演を聞いて元気になりました。講演内容も素晴らしいのですが、その講演を聞く姿に私は勇気をもらいました」との感想があった。専門家の方から、地球で起きている事実を聞くことももちろん大切だが、知識の差にかなりギャップがあり、僕たち若い世代からすると、内容がなかなか頭に入りにくいことがあると思っている。この間に、環境問題に関心を持った若い世代が入ることにより、若い世代に響きやすい形になると思う。環境問題に関する専門家と若い世代との橋渡しの役割を、僕自身もぜひさせていただきたいし、若い世代が共に学び合うための機会を脱炭素社会推進に関する包括連携協定で作っていただきたい。僕たち若い世代が活動を広げるためには、兵庫県や専門家の方々の力は絶対に必要不可欠になってくるため、その力が連携していくことは嬉しい。期待している。

3点目は、共創力には、現時点では書いていないことで、ぜひ、計画に取り入れていただきたいことについて話をする。僕にとって環境教育というのは、学校やイベントの場もちろんそうだったが、それらと同じぐらい家庭も環境教育の場だった。今ある事実を基に、社会の問題に対して自分はどうのように行動するのか、自分に何ができるのかを、家庭で母と対話する中で学んだ。そして、自分でできる環境活動のごみ拾いやごみの分別をするなどは、全て家庭でできること。環境問題に対して活動するための一歩目は、家庭だと思っている。だからこそ、親世代に働きかけることはすごく効果的であるのではないかと考えている。実際に選挙の投票率を見ると、若い世代の投票率が30%台でかなり低いことが問題視されているが、同居する両親が投票に行くと、子供の投票率が71%まで上がるというデータもある。具体的にはPTAに働きかけを行い、若者による環境講演会の実施を促進することなどが挙げられるかと思う。難しい部分もちろんあると思うが、まずは10代から20代の若い世代から親世代への共に学ぶ環境「共」育の推進という文言をこの計画に記載していただきたい。具体的な手法については、僕も一緒に考えて行動していきたいと思っている。

(中瀬会長)

41ページのライフステージに応じた環境学習・教育。作って20年ぐらい経ち、少し古くなった。1で乳幼児期、2で学齢期、3で青年期・成人期とあるが、次の高齢期の話については記載がない。これを早く見直さなければならない。例えばひょうごSDGsスクールア

ワードやトライ・やるウィーク、人と自然の博物館など教育委員会がらみのキーワードが全部欠落している。教育委員会でやっていることも少し見ていただくと、今、ご指摘のお話が全部入るような気がする。そこら辺もぜひ、バージョンアップしてほしい。

(増原委員)

4 ページ目の環境収容力のプラネタリー・バウンダリーで、未計測がいくつか残っているが、今年の9月ごろに未計測がなくなったバージョンが出ていると記憶しており、日本語化されてない可能性はあるが、ご確認いただきたい。

5 ページで、この書きぶりはなかなか難しいが、今年の7月や11月は、観測史上、世界最高の気温、明らかに異常だというのが共通認識であるため、ぜひ今年の異常さみたいなことを少し追記していただくとより緊迫性が伝わるのではないか。

最後に、例えば44 ページに施策体系があり、行政計画としては当然、脱炭素・自然共生といった柱立てになると思うが、一方で、県民市民が、どういう取組をするかという、我々が研究としては脱炭素や自然共生などというが、普通に生活している人は、別に脱炭素を目的に生きているわけではないため、やはり健康や快適性などが前面にこざるを得ない。例えば、脱炭素でも、皆さんご存知だと思うが、建築物の脱炭素化というのは、太陽光発電を設置するなどもあるが、ほとんど大部分は、建築部の断熱をよくすることで達成できる。それは、例えば床が冷たいと血圧が高くなることや生活習慣病になりやすいことなどそういう研究も出ているため、それを解消することは、つまり断熱で建物の性能を良くすることは、健康に繋がるということだと思う。もちろん我々は脱炭素を目指したいのだが、ある種逆転の発想というか、県民が健康に暮らすことや快適に暮らすこと、そういったこと的手段として高断熱みたいなものが入ると、結果として脱炭素になるみたいな話があちこちにあるのではないか。電気自動車を入れて、停電の時には家に供給できる V2H というのも安全や安心が目的になり、そういった機器がついてくることが、結構あるのではないかと思う。脱炭素・自然共生・資源循環などが生活の中で、自然と達成されているような状況は何か、物語でもよいと思うため、基本理念や目指す将来像にもう少し入ってくるとよりとつきやすいのかなという印象を持った。

(中瀬会長)

1 口メモを書いたらどうか。私に関与する委員会の報告書には1 口メモがいっぱいある。それも発言された方に書いてもらう。1 度、ものになるかならないかは別として、ここで議論したことを提言いただくことをしてみるとよいかもしれない。また考えてみてほしい。

(川井委員)

1 つ目、2 つ目は、一部取り上げていただいているが、別のところでも入れていただいた方がいいことについて述べる。19 ページに、今の環境課題が書いてある。40 ページにはより具体的な話として、有機フッ素化合物 PFAS の話も入っているが、今、割と社会的な関心も強いため、19 ページにも何らかの形で入れていただいた方がいいのではないか。実際に報道でも健康被害だとか、或いは EU での対応などがちょくちょく出ている。

2 つ目は、29 ページの森林の CO<sub>2</sub> 吸収が、人工林の高齢級化に伴い下がっているとのいわゆるグリーンカーボンの観点は書いてあるが、海の方が全然入っていない。今、ブルーカーボンの連絡会を立ち上げておられるし、そういう意味で関係するのが、35 ページの瀬戸内海の栄養塩の問題や藻場の生態系といったところが入っているが、同時に、自然環境

の保全や共生だけでなく、やはり CO<sub>2</sub>の吸収も、ぜひ、観点として入れておいたほうが良いのではないかと思う。今、温暖化や磯焼けで藻場が減ると、現状で吸収されている CO<sub>2</sub>が吸収されなくなるということが、大きな課題だと思うため、積極的にクレジットを取ることだけでなく、現状の藻場の保全がすごく大事なことだと思う。51 ページのところにもぜひ、入れていただきたい。

35 ページの図表 20 で、本文では 33 ページに大阪湾の湾奥部は、赤潮や貧酸素水塊等が発生と書いてあるが、結局貧酸素のことは全く情報として入っていない。どっちかというとその上の栄養塩類の不足だけに絡む図であるため、できれば、貧酸素水塊の分布などは、ぜひ湾奥部の課題として図表として入れていただけたほうがいい。

47 ページの一番下のところで、適度なメッシュにより管理すると表現されていたものが、適度な粒度により管理となっており、もっとわかりにくくなっている。市民にはあまり理解できない言葉であるため、これはもう少し、わかりやすい書き方にしてください、例えば、適度な規模や精度などの書きの方がよいのではないか。

これは、先ほどのご意見に続いての話であるが、省エネに繋がる、或いは CO<sub>2</sub>の削減に繋がるのが健康上いい、例えば家の断熱など、それから同時に経済的にもメリットがあることは、結構いろいろなことである。もちろん断熱をよくすると暖房費がかからなくなるし、私自身、ガスの発電のものを付けたのだが、そうするとやはり、電気代は減り、結果的には CO<sub>2</sub>の削減に貢献することがメリットとして挙げられている。かつ、緊急停電時の対応ができるとか、セットでお得のような例はぜひ、たくさん紹介していただいた方がよいのではないかと思う。自動車に関してもそうだし、交通手段という観点もあるだろうし、そういう意味で最近非常によいと思っているのは、神戸大学は山の上にあるが、電動自転車が増えたおかげで、学生のバイクが明らかに減った。CO<sub>2</sub>の削減になっているし、安全性も非常にあがっているため、やはりそういうことをたくさん提示していただくとういのではないか。

(中瀬会長)

色々なところで、わかめ栽培をしている。今、NPO が主体になって、結構頑張っている。そういったものもぜひ紹介していただけたらと思う。

(新澤副会長)

まず、目次を見ると、環境を取り巻く現状のところのボリュームが非常に大きい。それに対して、具体的な取り組みの方向は、最後の部分に 2 ページしかない。現状の方が書きやすいことはよく理解できるが、一旦現状把握したらそこに課題を見つけて、それに対応した具体的な取組を書かなければならないと思う。前回、例えば人口減少について書いているが、本体の方で受けていないという話をしたらそれに対するものとして担い手が不足しているというところだけ回答していただいた。それだけでなく、もっと人口減少していることから発生する影響がいろいろあると思う。例えば、今回増えたページでも、22 ページに DX の話が載っており、それが一体環境にどう関わるのかも出てこないし、後ろの方でも拾っていない。書きっ放しであると意味がないのではないかということが、他の部分についてもある。今回はこれでということなのだろうか、将来的にもう少し充実させるのかどうかを伺いたい。

また、難しい言葉が多い。骨格の段階で言わせていただくと、例えばバリューチェーンとサプライチェーンの違いは何だとか、これはかなり難しい。ライフサイクルも一緒に出

てくるということで、多分、ライフサイクルは負荷を全部集計して、末端で集計する。それに対して、サプライチェーンは、あくまでも個々の、主体に関することではないかと思う。

さらに、13 ページに TCFD で賛同企業数が出てくるが、賛同というのは何を意味するのかを、ぜひ調べておいていただきたい。日本では多いが、あまり評判がよくない。数字は多いが、イギリスに比べて日本の取組が進んでいるかということ、実はそんなことはない。これは環境省も使っている数字なのだが、読む人によっては、兵庫県もこんな数字を使っているのかというふうを受け取られかねないものである。

(中野朋子委員)

キャッチフレーズの恵み豊かなふるさと兵庫、これはよいと思うが、2 ページ目にある、目的(3) 兵庫らしい将来像、兵庫らしいとは何だろう。耳あたりのよい言葉を使われてしまうと何かだまされているような気がしないでもない。例えば、県土の多様性、県としても、兵庫5国連邦という言葉で、多様性をポジティブに押しつらっしゃるが、ネット上では、兵庫スラビアということで、多様性でなくバラバラだという指摘もある。兵庫らしいというのは、大阪とは違う、岡山とは違う、というオリジナリティを發揮する必要は、別にないため、これまでの県の歴史や政策を踏まえた上で、という意味であれば、らしいという言葉は少し違うのではないかと私は思う。

建築物の脱炭素という言葉が言われたが、兵庫県神戸市の須磨ニュータウンに住んでいる。ニュータウンが今オールドタウンとなり、いずれゴーストタウンとなるだろう。そういった町が、少なくとも神戸のあちこちに点在している。にもかかわらず、ニュータウンから距離が離れてないところで、緑豊かな山を切り開いて新たなまちづくりが行われている。もう今、家ではなく、町が使い捨てになっている。これほど環境負荷が大きいことはない。建築物の脱炭素に触れるのであれば、まちづくりそのものの見直し、少なくとも神戸市内で新しい宅地開発はやめて欲しい、と私は思う。町レベルでの脱炭素を取り上げていただきたい。

(中瀬会長)

海外に行くと治安のあまり良くないところがオールドタウンで、新しいところがニューシティという。それが広域で、日本でも起こってきた。まさにそのご指摘の通り、そこら辺で高齢化が起こっている。

(近藤委員)

温暖化と生物多様性と資源循環ということで、温暖化や、資源循環というのは産業が関わっているため、経済がうまく回り、人もつき、うまく回っていきそうな雰囲気があるとところが、生物多様性の場合、兵庫県がコウノトリ、要は、それを保護する担い手は一体誰なのかということがよく見えない。里山も保持しようと言われていたのだが、もう誰もいないのに、どうやって保持するかがここから読み取れないということが私の印象である。大学の学生が、例えば、コウノトリをうまく保護するため、調査しているが、休耕田のままにしていると生息が難しいということで、借りて水を張り保護をする。それもほぼ全部ボランティアベースで行い、アンケートをとると高齢者の方がやられている。その次の担い手は本当にいるのかということ、ほとんどない。そうすると、持続性が全然見られない。言葉では、非常に綺麗なことが書かれているが、本当に生物多様性をやっつけようと思う

と、お金を稼げるような人がそこにいないと回らないのではないかと。言葉が非常に綺麗で踊っているが、本当にできるのかということを感じた。

(中瀬会長)

やはり共創力のところをどう書くか。実は、豊岡市は円山川の洪水を起こした3日後に、環境経済戦略を作っている。その時にコウノトリ育む米や、そこら辺の提案が市民から出ている。市民が動き出し、その頃彼らは若かったが年をとり、平均60歳以上になっている。それがどの分野でもいえるため、まさにご指摘の通り、人材がどう活動し、そして経済的にも、きちんと成り立つかという話。そこら辺は前の中貝市長が面白いことをやっていた。豊岡で研究すると補助金、旅費を出すということで、日本中の大学の先生が来て、結構PRした。環境経済を検索すると豊岡が結構ヒットする。そういう時代もあったが、今それがどんどん劣化していき、まさに先生のご指摘の通りそういう人材をどうするかが、まさに緊急の課題と思う。

(新澤副会長)

45 ページで廃棄物のことが載っており、前回コメントしたことを随分大きく書き替えていただき、ライフサイクル、サプライチェーン全体での資源循環が構築されるということなのだが、少し難しい。何を意味しているのか。環境配慮設計とかそういったことなのか。そうだとすれば、ライフサイクル、サプライチェーンの資源循環とはどういう意味かをもう少しはつきりと書いてもよいのではないかと。

それと関連して、44 ページ、真ん中辺りに脱炭素のところではサプライチェーン全体の脱炭素が出てくるが、サプライチェーンで最近よく言われるのは、環境関連で言うと、投資家が資金の貸付などがある企業に着目したときに、サプライチェーンから、リスクが資金を投資する主体に及ぶ、という認識が強まり、投資する企業本体ではなく、サプライチェーンの中からリスクが及んでくることを懸念し、スコープⅢという話が出てきている。しかし、ここは行政であるため、行政が脱炭素という時に、サプライチェーンという必要があるのかどうか、直接それぞれの主体に働きかければよいのではないかと私は思う。なぜここで、サプライチェーンという言葉が出るのかがわからない。

(狭間委員)

全体を通して、先ほど藻場の話もあったのだが、弱いと思うところを少しお話させていただく。

1つは、兵庫県は森林・里山が多いため、山の豊かさを守る視点は多いと思うのだが、海の豊かさを守るという視点が、少し弱いと思う。日本海側にも海を持っているし、もちろん瀬戸内海そして淡路島をはじめ、島も兵庫県にある。具体的にどういうことかということ、瀬戸内海も栄養塩対策のことは書いていただいているが、例えば、海洋プラスチックごみの問題など、もう少し大きな視点での海の豊かさ、という文言は、実は全然ない。

あるいは、例えば46 ページに、自然環境の充実を、経済だけでなく、地域で育まれてきた食や祭りなどの人びとの暮らしや文化・伝統の継承につなげるとある。これは今、ユネスコでも文化的景観という、人の営みと自然が調和したまちづくり、その視点もすごく大事だと思う。里山の事例としてコウノトリの話を書いてくださっているが、おそらく島の漁港の文化的景観など、海側の生活をされている方との自然との調和のような文言もおそらくあると思う。そういう視点で見ると、少し海の視点が弱いというのが全体の感想であ

る。

また、企業と共創力をどう発揮するかという視点もかなり少ない。41ページの3現状で、脱炭素経営の環境に配慮した企業活動の要求の拡大、と書いてあるのは、世間的に要求が拡大されている、という意味だと思うが、兵庫県として、たくさんある企業とどういう取組を推進するのか。公民パートナーシップというだけの表現なので、具体的に書く必要がないのかもしれないが、例えば滋賀県では、地銀の滋賀銀行が、環境ファイナンスやカーボニュートラルローンなど、たくさん市民向け企業向けに環境によいことをすれば、ESGファイナンス借り入れできますよ、みたいな取組をされており、その1つで、このSDGs私募債のようなものも発行されていて、その利益をどうしているかということ、県と連携して、学校の環境学習に使ったり、環境の改善に使ったりなどで支出されている。つまり、企業が企業で勝手に頑張ってくださいというのではなく、それを取り持つ銀行などを間に入れて県が金融機関を通して、中小企業も含めた地場産業が、そろって頑張りましょう、というような体制をとっている。きつく言えば企業の責務というものもあると思う。県レベルになるとやはり事業者の責務というのも欠かせないため、食料廃棄物もCO<sub>2</sub>の排出も物流の問題ももう目の前にあるし、衣料も、フランスは去年から事業者が売れ残った衣料の廃棄を禁止するという法律を昨年策定したが、条例までつくれとはいわないが、もう少しそういう視点が欲しいなと思う。

さらに、まだもっと先かもしれないが、この計画を作り、こういうことを実行していきたいという目標を作り、最後にモニタリングの仕組みというのだろうか、運営とモニタリングの仕組みをどうしていくかという、やはりその辺の実行をしていくぞ、チェックしていくぞというのも最後にいるのではないか、目指す、で終わっては、取り組む方向で終わっては、駄目かなという気がする。

(泥委員)

48ページに書かれてある、トレードオフの最小化という観点は非常に重要だと考えている。基本計画でビジョンの真下にあり、個別の計画のキーになるというところ。それぞれ個別の計画を考えていく中で、やはり、他の計画等の施策を見ていただき、何が最小化にいい方法なのかというのは、基本計画で理念として書いていただくことは非常に重要と思っている。若い人とお年寄りのトレードオフや、経済と環境のトレードオフなど、いろいろな観点があると思う。そこはもう少ししっかり書いていただいた方がよい。

(向山委員)

先ほど近藤先生がおっしゃっていたことに、若手の担い手というところで少し思うところもあったため、お話させていただく。僕自身高校卒業してすぐにNPO法人を立ち上げ、僕たちが整備する里山の問題も兵庫県内の里山と似ていると思うのだが、山主が高齢化してしまい、山の持ち主ですら、今の自分の山の状態がわからない、行政に管理をお願いしようと思っても、どうしても2、30年待ちという状態になってしまう山がすごく多いと思う。行政に任せるのではなく、僕たちも一緒にぜひ、関わりたいというか、その地域の里山を何とかしようと思ひ、立ち上がり、NPO法人を僕自身が立ち上げた。そういう地域などに多い里山の問題を次世代の担い手が出てこない、という大きくある理由の1つとしては、食べていける姿が見えないことがあると思っている。僕自身も今、模索している中なのだが、この里山の問題やコウノトリの問題にしる、ここの活動をずっと全力でしたところで、それがすごい労力があることだが、それでも食べていけなかったとなると、若い世代は、



なかなかそういう問題に関わろうとも思わないことがあるため、資金面の補助もそうだし、里山の整備をしたら、食べていけるというモデル、見える化、里山を整備する今のボランティアで終わらせない、きちんと食べていけるところに見える化するなど、そこの補助があると非常に嬉しい。

(増原委員)

DXのところ、資料2を見ると、こちらの委員会の指摘で分けて書いていただいたと思うが、環境との関わりを加筆してほしい。例えば、22 ページで、働く側から見ると、多様な働き方というのは、こういう会社を選ぼうかなということにつながるし、環境面からは通勤の環境負荷がなくなることがメリットとしてある。一方で、トレードオフではないが、まず通勤しているときは、家庭は昼間あまりエネルギーを使わない暮らし方になる一方で、ずっと家で仕事をしていると、当然、家庭のエネルギー消費が増えて、これは別に兵庫県に限らず、世界的に言われていることだと思うため、そういう側面も考えなければならない。昼間かなりの時間家にいるのであれば、居住環境をもっと良くしていくということもやっていかないと、家で仕事しにくいということになる。

もう一つ忘れてはいけないのは、テレワークやオンライン会議などは当然インターネットを使う。場合によっては、大きなデータ量のやりとりがあるため、インターネットやデータセンターのエネルギー負荷が結構多い。その辺りを研究でも今、いろいろやられているが、通勤が減ること、データセンターの稼働が増えることのどちらがよいかの結果はいくつか出ていて、まだはっきりしない。そういう研究の動向も少し追記していただくと、環境問題との関わりが見えてくるのではないか。

(中瀬会長)

事務局から質問はあるか。

(東尾環境政策課長)

質問というわけではないが、DXのところは、確かに環境問題という側面からのとらえ方ができてない、何を出口にしていっていいのか、つながっていないと思っている。手段として、中野先生に冒頭言っていたような世代間格差を埋めていくため、そういうものをうまく使っていこうという意識があったが、増原委員のご指摘、付け加えなければいけないし、また新澤副会長からの指摘の通り、サプライチェーンやライフスタイルなどの言葉の使い方など、やはり曖昧に使っていると思うため、ここは精査したいと思っている。そして、企業との共創力について、先ほど、SDGs の私募債で寄付いただいていると、実は兵庫県に事例があるが、そういうところまで書ききれていない。今度から反映していきたいと思う。

(中瀬会長)

43 ページの中野委員が言われた理念について、第5次は地域が先導し、など結構よいことが書いてある。ここら辺をうまく取り入れてもらおうとよい。

また、兵庫五国という言葉が言われていたが、私は、今、但馬・淡路にはほとんど行かなくなった。県内各地を回っていたころは、兵庫五国がピンときたが、県民の方々は、そんなに兵庫県内を移動していないかもしれない。行政の方々はよくわかると思うが、普通に生活している人にとって、五国とは何かをもう一度考えたほうがいいかもしれない。そ

こら辺を上手く入れていただき、43 ページの理念をもう 1 度、提案していただけたらと思う。

そして、26 ページでいろいろな文献を書いていたが、やはり、環境施策や環境問題などを考えるときは、レーチェル・カーソンの沈黙の春、成長の限界、不都合な真実。この辺りの三部作が環境問題の始まりであるため、ぜひ、文献を入れていただきたい。

33 ページの右側の下から 2 つ目、野生鳥獣の適正な保護管理と書いてあるが、この被害は、もう少し正確に調べないといけない。また生物多様性と鳥獣被害について、議論が少ない。各種の植物を探しに山に入るが、すごく減っている。伊吹山の花畑の種類や株数が年々減少していくように感じている。シカが原因で、ほとんど壊滅状態である。シカ柵を一生懸命ボランティアで作られているが、シカが入って食べてしまう。そういう意味で、そこら辺の本当の農業被害と同時に、生物多様性に対する獣害などの議論をどうするのかは、考えていただけたらよいと思う。

最後に、共創力は、1 つのキーになると思う。行政が、いろいろな項目を書かれるが、本当にそれは誰がやるのか。市・町を含めて、市民、NPO 団体の人々の活躍をどうするのかをぜひ、考えていただきたい。また、棚田ラバーズなどいるので、もう少し探して欲しい。コウノトリの郷では、コウノトリ研究所などが活動されている。そういう意味では、我々の網にかかっているが、いっぱいおられるので、ぜひ、共創力の担い手として、見ていただきたい。

共創力にこだわったが、新しいテーマになってくると思う。市民や団体から出てきた提案が社会を動かす、そういうことがここでいう共創力だと思う。そういうところとこれからどううまく一緒にやっていくのかがほしいと思う。

閉会(午後 12 時 00 分)